随想——アブダーラさんの詩によせて

周郷博

私はめったに
舌を使ったり耳で聞いたりして
コミュニケートするということを
　しない

ほとんど
読んでいるかあるいは
書くということだけで日を
送っている

私が読んでいるときは
もう死んでしまった者が
私と語りあっているし

私が書いているとき
私は
まだこの世に生まれてこない人たちに
話しかけている

これは私が
今このときにだけ生きている
のではないことを証(あか)しするためだ

それなら空間はどうなってる？
私はどこか特定の場所に生きている
ようには思えない

読んだり書いたりしているとき
私は同時に冥想しているから

これが実は私をvoid（空間(すきま)）に生きる
ことを余儀なくし
それを一生懸命にのがれ出ようとさせる

これは、ことし（一九七一年）三月二十四日付のサイン入りでニューヨークから送ってきてくれた、アブダーラ・ナセルディーン（Abdallah Naceredine）さんの第三詩集「いなづま（Lightning）」の59番の詩の訳です。なぜ、こんな詩に

目をとめて、私がまずい日本語訳などにしてここにのせるのか。それは、主として、この詩の三、四、五連をよく読み味わってほしいからなのです。私たちは「もう死んでしまった人」過去の人々と「語りあって」いない。そうして「まだこの世に生まれてこない人たち」とも話し合うということもない。過去からも断ち切られ、未来という（いやでもおうでも「生まれ」「育って」くる者たち）ともつながりが切れている。気まぐれで、「食い散らす」ばかりの「今」この瞬間、瞬間という（ほんとうはそんなものはないはずだ）説明のつかない怪物と同居して日ごとに生命力が消尽しつくされているのではないか。それが「不安」で、いよいよ欲のかぎりをつくしてくたびれてしまっているともいえる。第一、これでは教育が成り立つ基本が根底からくずれている、と私は思った。

ナセルディーンさんは、去年の四月ごろふらっと日本にやってきて、ちょうど、七月の東京の夏祭りのころ、これから、ビルマ、インド、アフガニスタンなどを通ってジュネーブへ行く、といって別れた。そのとき、私たち二人は、四谷見附の地下鉄の駅を「上った」そばのコーヒーの店で会って話した。そのときに、彼は私にこういった、「私は地球だから、いつでもグラヴィテートして(回って)いるんだ」と。私はその言葉にびっくりしたが、彼の第一詩集「自分自身であること Être Soi-Même」の序文を読んでみると、なるほどとうなずけるものが私の胸にきた。

――私の名前は人間（un Homme）という、まったく短い名です。私は、無からやってきて、無へと向かってすすんでいる。私は「自然の子（le Fils de la Nature.）」です。……私は「人生という学校（Ecole de la Vie.）」へ通っている……私の国籍は、人類であり、私の祖国は宇宙です……私の目的は「人類という種に自分を役立つように生きる」ことです。……

まったく、いまの日本人には縁遠くて「なんの寝言をいっているのか！」などといわれそうですが、そういうアルジェリアの詩人と、どういうめぐり合いで知り合いになったのか、ともかくそんな人＝人間がいる、ということを私はみんなに知らせたくて、この短文を書いている。

詩人――ですが、アブダーラ・ナセルディーンさんは祖国アルジェリアの独立戦争のときは、二十歳を過ぎたばかりの青年で、I'ALN アルジェリア独立解放軍の有力な幕僚の一人として活躍した人です。そういう大きな革命の流血の中で学んだものが、こうした彼の人柄と思想（詩）に結晶しているのかもしれない、と私はひそかに考えます。甘えつづけてはいられないそんなものをいっしょに思いたいのです。